

# 継続的な指導でディベート実践

## —教科書のアウトプット活動に—

中川 未来

### はじめに

本稿は、勤務校における2017年4月高校1年入学から2020年3月高校3年卒業までに継続的に指導してきた生徒たちとの実践の報告である。

生徒たちの入学前に、高校3年間を通してどのような英語の力をつけさせたいか、どのように行っていくか、担当教諭で議論した。その中で、昨今の大学入試の傾向はもちろん、英語は言葉であるから、言葉を使わせる場面を多く用意し、そうすることで4技能を伸ばすということを1つの柱とした。最終的には、ディベートを行いたいという目標もあった。生徒の入学後、授業・定期考査・模試等を通して、生徒のニーズに応えたり不足部分を補ったりするための方向修正も柔軟に行った。

英語の授業の中で、特別な教材ではなく授業で扱う教科書を用いてクラス全員がディベートを行えるように継続指導してきた実践を紹介する。

### 1. 英語は〇〇だから、△△ないと定着しない！

皆さんは、この空所になにが入ると思われるだろうか。英語の先生方と意見交換ができる場面でこの質問を投げかけると、多岐にわたるアイデアをいただけるが、「英語は実技だから」というような視点での意見が多い。以下は筆者の授業における基本方針である。

筆者は、生徒との実践の中で、「英語は言葉だから、使わないと定着しない」ということに気づかされた。授業において、学んだことは使わせるように徹底していくと、生徒の英語力は確実に上がっていく。模試等での結果にも表れてくる。

また、教室・授業だからできることを大事にした。生徒同士のやり取り、お互いから学ぶこと、気持ちを共有することは、対面でないと難しい。個人で自宅等でできることとそうでないことを区別し、授業という環境の有効利用を意識している。

### 2. 教科書の output 活動としてのディベート

ディベートというと、新たに社会的な問題について議論するという固定観念のようなものがあるが、筆者が目指したディベートの形は、教科書を用いた output 活動である。コミュニケーション英語ⅠやⅡの教科書のレッスン本文を十分に理解し、音読等も十分に行った後で、最終的に学んだことを使う場面としてディベートを設定した。そうすることで、教科書で学んだ単語・表現・文法・題材を output できる。教科書にはディベートのテーマとなりそうな題材も豊富である。また、教科書で学ぶ延長上にディベートがあることで、ディベートが特別な準備をしなければならないものではなく、身近なもの意識づけできる。以降の節で指導経過を報告する。

### 3. 話すことに関する指導経過 土壌づくり

ディベートの中心は話すことである。聞いて、メモを取るという場面もある。まず、英語を話すことに躊躇しない雰囲気をつくるため、高校1年生の当初の段階から、コミュニケーション英語Ⅰの授業で、One Minute Chat を帯活動として導入した。この帯活動を、ディベートを目標にし、少しずつステップアップさせていった。以下に詳しく述べる。

### 4. One Minute Chat

**第1段階** 自己紹介や身近な話題などの与えられたトピックについて、ペアで1分間英語で話す。

➡必ず毎回違うパートナーと話す。相づちの表現等を導入しておく。複数回同じトピックを継続すると、表現が定着したり、前回言えなくてもどかしい思いをしたことを言えるように準備してきたりできる。

**第2段階** 与えられたトピックについて、メモを準備し、メモをもとに1分間英語でスピーチをする。パートナーはメモを取り、You said ... から始まる質問をする。

One Minute Chat		14 (No. 1) Name _____	
<b>Your Preparation</b> Topic : _____ Memo : _____		<b>2 Partner's Speech Memo Partner :</b> _____  <b>Question</b> You said _____ ( Why / How / When / What / Where ) _____ ?	
<b>1 Partner's Speech Memo Partner :</b> _____  <b>Question</b> You said _____ ( Why / How / When / What / Where ) _____ ?		<b>3 Partner's Speech Memo Partner :</b> _____  <b>Question</b> You said _____ ( Why / How / When / What / Where ) _____ ?	

➡第1段階では、会話で1分なので発話量は1分以下であるが、第2段階では、一人で1分話す。聞き手は You said ... から始めて相手の話を要約し、質問をする。話し手は聞き手の質問に即興で答えなければならない。メモ準備の時間をはじめに取るが、慣れてきたら準備の時間を短くする。同じトピックを複数回行う。

**第3段階** 教科書のレッスンの内容について、メモを準備し、メモをもとに1分間英語でスピーチをする。パートナーはメモを取り、You said ... から始まる質問をする。

➡生徒が第2段階の形に慣れてきたら、教科書で扱った内容について、話すことを始める。教科書に出てくる表現を使うことができる。

**第4段階** 教科書のレッスンの内容についてトピックを与える。OREO形式でメモを準備し、メモをもとに1分間英語でスピーチをする。パートナーはメモを取り、You said ... から始まる質問をする。話した内容についてライティングをする。

One Minute Chat 2 <sup>ND</sup> Year 1 <sup>st</sup> Term Latter Half		
24 (No. 1) Name _____		
<b>Your Preparation</b> Topic : _____  Memo : O R E O	<b>1 Partner's Speech Memo Partner :</b> _____  <b>Question</b> You said _____ ( Why / How / When / What / Where ) _____ ?	<b>2 Partner's Speech Memo Partner :</b> _____  <b>Question</b> You said _____ ( Why / How / When / What / Where ) _____ ?
<b>Writing</b> _____ _____ _____		

➡OREOとは、Opinion/Reason/Example/Opinionの略であり、この型に沿って話させる。話し始めの表現を導入すると進めやすい。同じトピックで複数回活動を行った後、ライティングをさせると、複数

技能を融合させた活動となる。

**第5段階** 教科書のレッスンの内容について、トピックを与える。OREO形式でメモを準備し、メモをもとに1分間英語でスピーチをする。パートナーはメモを取り、You said ..., but I don't think so because ... と反論する。話した内容のライティングをする。  
 ➡自分の真の意見がどんなものであれ、話し手の意見に反論しなければいけない状況に置かれる。反論部分も、OREOを基本に行えばよい。ディベートに近い形になってくる。

**第6段階** 第3、4、5段階について、準備の時間を減らす、もしくは与えず、トピックを提示したらすぐに話し始めさせる。

➡準備の時間を与えないことで、より即興性が高まる。これまでの活動が十分に行えていれば、準備の時間がなくても問題はない。

## 5. One Minute Chat の汎用性・段階の上げ方

One Minute Chat のどの段階についても、汎用性が高い。活動の型をわかっていれば、トピックを変えただけで活動が成立する。

また、それぞれの段階で、同じトピックを複数回、他の生徒と行うことで表現の定着を図ることができる。また、準備の時間を減らす、あるいはなくすことで、活動の負荷を上げることができる。

それぞれ、次の段階への移行については、無理をせず、生徒全員が活動を行えるようになったところで進む。目安としては、定期考査ごとに段階を上げていく。

評価については、タイムキーパーをしながら、生徒全員の活動をすべて見ることは困難である。また、話すという一瞬で消えてしまうものを評価することは難しい。そして、いくら文法的な正確さは欠落したとしても、生徒同士のコミュニケーションが成立していることもあり、こうしたいわゆる「生もの」を一定の基準で評価することは、非常に困難である。よって、話した後でじっくり書かせたものを評価するのは1つの方法である。十分に話し、盛り上がった後にライティングをさせると、水を打ったような静けさで集中して書いている。関連トピックでのライティングを定期考査に課すことも可能である。

## 6. ディベートまでの指導経過

One Minute Chat で英語を話すことに関して素地

ができ、ディベートで使える表現や技能を習得した後、緩やかにディベートへ移行する。私が授業で行ったのは、“Miniature Mock Debate”(木村, 2018)と呼ばれるものにアレンジを加えた、3人組で行うものである。3人の役割分担は、肯定側・否定側・ジャッジである。一定のフォーマットに沿って進むディベートで、役割を3転回することで、テーマに対する別の見方を体験できる。outputの量が非常に多くなる。

いわゆる Academic Debate ではない理由は、自分が話さなければならない責任感の大きさである。Academic Debate も一度試してみたが、グループ数名での活動となり話す順番が少ないこと、即興性は多少あるものの、準備をしてからのぞむタイプのディベートであること、一連のフォーマットが長いことが、授業において行う際の障害になると思われる。 “Miniature Mock Debate” は、フォーマットが簡素で取り組みやすいため、クラス全員が授業内で行えるディベートとして取り組むことを始めた。各発言は、1分を基本とする。

Miniature Mock Debate	
Statement : E-books are better than paper books.	
Affirmative side : 肯定側主張	O I believe that e-books are better than paper books R because _____ E for example, _____ O That's why I believe that e-books are better than paper books. / For this reason, I believe that e-books are better than paper books.
Negative side : 否定側反論	Summary You said _____ (summarize the affirmative side's opinion) O but I don't think so, / but that is not true, / but that is not a good thing but a bad thing. R because _____ O I believe that paper books are better than e-books R because _____ E for example, _____ O That's why I believe that paper books are better than e-books. / For this reason, I believe that e-books are not better than paper books.
Affirmative side : 肯定側反論	Summary You said _____ (summarize the negative side's opinion) O but I don't think so, / but that is not true, _____ R because _____
Judge's Decision : ジャッジ判定	O I think ○○ is the winner R because _____ E for example, _____

Miniature Mock Debate の導入の際は、型の習得に重きを置くため、トピックは平易なものを選ぶとよい。一度型を導入し、習得できれば、後はstatementを変えるだけで活動が行える。教科書のレッスンのテーマで、ディベートに発展させられそうなものは Miniature Mock Debate を最終のoutput活動として取り入れた。

ディベートを行った後は、必ずライティングをさせるようにした。ライティングは、肯定側・否定側を選べるが、よりチャレンジングなのは、自分の立場ではないほうを選んで書くことである。

## 7. Miniature Mock Debate の利点

### ①授業中の教科書のinputをoutputできる

まず、Miniature Mock Debate の最大の利点は、教科書の題材、文法項目、表現を定着させることができることである。授業で扱った英文をしっかりと音読した後で行うと、それをを用いて肯定側・否定側で話すことができ、ジャッジは聞くことができる。最後にライティングを行うことで、複数回outputできる。

### ②一人ずつの役割なので怠けられない

何人かのグループのメンバーの一人という活動と異なり、生徒は一人で役割をこなさなければならない。一人が怠けてしまうとすべての活動が成り立たないので責任感が増し、生徒たちは主体的に積極的に活動を行わなければならない状況に自動的に置かれることになる。

### ③自分の意見とは異なった立場から表明

常に自分が思っている立場ではなく、逆の立場から意見を言わなければならない状況に置かれるので、物事の賛否両サイドを考える練習になる。普段の生活では、こうした状況に置かれることが少ないため、授業で機会を与えることの意義は大きい。ライティングを行う際も、譲歩やカウンターアージュメントとして、反対意見を入れることも十分可能である。

### ④複数の技能を融合させた活動

教科書を読んだ後に行う Miniature Mock Debate では、読んだ(R)ものを話し(S)、聞く(L)ことができる。最後にライティング(W)を行うことで、4技能の統合が可能である。複数の技能を利用すると定着度が高い。

### ⑤楽しい活動 勝ち負けがある

最後にジャッジが、勝者をその理由とともに述べると、非常に盛り上がる。生徒たちには「勝ちたい」という気持ちがあり、言いにくい立場になっても頑張っている。ジャッジも、勝者の理由を述べるだけでなく、敗者のよかった点を述べフォローするなど工夫が見られた。

生徒たちが活動を楽しめているかを示す1つの指標が、「生徒たちが休み時間にも英語をしゃべっていることがある」である。Miniature Mock Debate を行った後の休み時間に、まだ議論を続けている生徒を見かけたら、活動は成功していると言ってよい。英語教師冥利に尽きる瞬間である。

### ⑥汎用性が高い

Miniature Mock Debate の型が習得できていれば、トピックを変えることで活動が行えることから、非常に汎用性が高い。投げ込み教材を用いれば、さらに即興性も高まる。もともと生徒が持っている知識を活かすことも可能である。大学入試問題のテーマを扱うことも十分可能である。最近の大学入試でも、ディベート形式の会話の後に英作文をさせるようなタイプのもので出題されている。こうした面からも、Miniature Mock Debate という形でディベートを授業に取り入れていくことは有益である。

## 8. Miniature Mock Debate の欠点

### ①input が不十分なまま output はできない

この活動を成功させるためには、十分な input が不可欠である。教科書本文の読解、音読が不十分なまま行くと、型があるためになんとか時間は過ぎるが、白けた雰囲気になってしまう。しっかり活動させるためには、まず input が重要である。

### ②クラスマネジメント(時間・人数)の工夫が必要

クラスの3分の1が熱意を持って話しているの、どうしてもうるさくなりがちである。タイマーを投影したり、終了の合図を明確にしたりする等、工夫が必要である。筆者は、Miniature Mock Debate の流れと話し出し、各発言の持ち時間をプロジェクターで投影し、タイマーは大きなものを教卓に置いている。開始、終了の合図はベルで行っている。

十分な時間がない場合、話す時間の短縮や、3転回が望ましいが2転回とする等の方法も考えられる。

生徒たちが3人で割り切れない人数の場合はどうするか、という問題もある。この活動は、3人で割り切れる人数のクラスサイズが望ましいが、足りない場合の対処法として、自分も入る(とても楽しい経験です)、ALT を呼ぶ、他の英語教員を呼ぶ、英語に興味のある同僚、そのクラスの教科担当や担任を呼ぶ、留学生を呼ぶ等、準備をしておく。

### ③型にはめ過ぎという懸念

One Minute Chat も Miniature Mock Debate も、定型に沿って行われる。そういう面では、実際のコミュニケーションとは異なる「作られた」「不自然な」発話という印象を与えるかもしれない。しかし、話し出しの定型があることで、生徒たちは安心して発話を開始することができる。話し始めさえ

すれば、話し続けなければならない。大事なのは、話し始めの定型よりも、その後にくるものである。

また、流れのフォーマットはあっても、話す内容はトピックによって異なる。教室での授業という場面では、ある程度型にはめた練習が現実的である。

## 9. 最後に

input したことを output するよう意識して取り組んだ3年間、特に1、2年次における初期の指導で複数の授業担当者でやり方を共有できたことは有り難かった。他の様々な要因ももちろんあるものの、英語を使うことに力を入れた生徒たちは、大学入試も勇敢に乗り越えていった。

昨今、音読や学び合い、話し合いのような形態を控えなければならない状況もある。感染防止に留意しながら、input したことを output するにはどのような活動が考えられるだろうか。英語で自問自答もできそうである。オンライン上での双方向のやり取りが可能なのもある。オンラインでの「チャット」機能を利用して、spoken ではなく、written (タイプ)でのコミュニケーションの可能性もある。現在模索中である。

最後に、ディベートに意欲的に取り組んできた生徒の言葉を引用したい。

- ・授業で毎回、英語でクラスメイトと話して、コミュニケーションを成立させる楽しさを知った。
- ・授業で扱った内容でディベートをすることで、学びを深められたし、相手の意図を理解して、即座に英語で意見を返すことができるようになった。
- ・英語を話すアウトプットに日ごろの授業で取り組んで、自分の英語力向上につながったと思う。

## 参考文献

- 榎葉みつ子(2008).『英語で伝え合う力を鍛える！1分間チャット&スピーチ・ミニディベート28(目指せ!英語授業の達人6)』明治図書出版。
- 木村純一郎(2018).「英検2級の「壁」を超えるための授業実践 最終回:考える力を付ける」『英語情報』2018冬号, 公益財団法人日本英語検定協会。
- 小林良裕(2009).『高校生のための初めての英語ディベート』S. A. D. Works.